

F/T13
FESTIVAL/TOKYO

ARTS
COUNCIL
TOKYO



東京文化発信
プロジェクト



TOKYO ● 2020

オーバードーズ：サイコ・カタストロフィー /
シアタースタジオ・インドネシア
演出：ナンダン・アラデア

Overdose: Psycho-Catastrophe / Indonesia Theatre of Studio
Direction: Nandang Aradea

11.9 (Sat) - 13 (Wed)

池袋西口公園
Ikebukuro Nishiguchi Park



ディレクターズ・ノート

ナンダン・アラデア

カタストロフ、荒廃、混沌の中で演劇が脱構築されるときによく見られるのは、「祝祭」の形式の中に自身のアイデンティティを見つけるような物語のあり方だろう。それはハイデガーが、死に直面し「破局の喜び」の中に自己を発見したこと、ニーチェが「いかなるカオスの中でも人生を愛せよ」と言ったこと、また、キルケゴールが「信仰の飛躍」を見出したこととも重なる。

たとえば宗教は、タハリラン（イスラム教の葬式）のような儀式や葡萄酒（キリスト教における血の象徴）のようなシンボルを取り入れながら、「祝祭」を通して、アイデンティティを形成してきた。私が今取り組んでいるこの作品『オーバードーズ：サイコ・カタストロフィー』は、こうした物語の枠組みから免れ、そこで指摘されてきた「飛躍」をさらに超越する可能性を持っているはずだ。

その演劇の主題は、外界の事物の中に見出される。そして、われわれをより深い現実認識へと誘いこむ。宇宙全体についての理解を引き出すには、合理性だけでなく、感覚に命を吹き込むことが必要となるだろう。そこで起こった事実を身を委ね、完璧な知識といったものから脱却し、対象と自己とを統一すること。「無」となり、あらゆる対象と自己を消し去って初めて得られる知識なき理解。それが、カスニヤタン(kasunyatan=真実)なのだ。

こうした、言葉で説明することが困難な思考は、「ミラガ・スクマ(魂の身体/miraga=真の身体、sukma=魂)」と呼ばれる。日常生活においてわれわれは、人間の霊や魂といった精神的なものは、

身体に内在していると考えているが、これはその逆で、すなわち、精神が身体を内在しているのだとする考え方である。船が海を積み込み、丘や山が木の中にあるように。太陽が燃やされ、寝床がカエルを抱き、松明が火を探し、姿もなく音が鳴り、クリス(インドネシアの短剣)の中に鞘があるように。

私は、介入を厭わない身体を使った演劇、バランスを崩されることを拒絶しない、介入や中断に対して身を委ねることのできる演劇を作っている。それは、われわれ自身があらゆる経験を受容できるよう、誰の、いかなる身体の前にも分け隔てなく開かれた演劇だ。

この前衛的な作品、『オーバードーズ：サイコ・カタストロフィー』は、民間伝承やオランダ植民地政府の資料、バンテン族の神話などを通して、1883年に起きたクラカタウ火山の噴火を批評的に読み解く過程から生み出された。

クラカタウにおけるサイコ・カタストロフィー。それは悲劇や混沌に直面した身体に現れる。大文字の「P (pribadhi=個、あるいはpemeritah=政府)」によって制御された集合的の身体=山の身体が、海の身体となり、その高さが深さに代わったとき、それは、オーバードーズ(過剰摂取)のメタファーとしてわれわれの前に立ち現れるのだ。

この作品のドラマツルギーは、カタストロフについての物語、その心理にある。

海に浮かぶ養殖いかだのような三角形の竹組み

できたステージが、その構造を名実共に支える。制作は、オープンラボ形式で、「ミラガ・ラサ (miraga=真の身体、rasa=感覚)」のメソッドを通して進められた。「ミラガ・ラサ」とは、ライス (ジャワの伝統曲芸)、ヒジャイ (バンテン州チマンデ地方に伝わる健康療法。呼吸を意識しながら精神・肉体を一つにすることを目的とする)、水を使ったインスタレーション、海の呪文、香辛料、深海や船の音、ゴン・カブユタン (インドネシアの伝統音楽) をベースにした、フィジカルシアターである。詩的調和、カオティックで儀式的な魔術……この「ミラ・ガラサ」と民間伝承が持つ強靱さは、本作を通して強く印象づけられるだろう。

この舞台の混沌を目の当たりにした観客の反応は、脈拍や酸素濃度を計測する装置を経て、デジタル・ムード・メーターやエモーション・ディスプレイに表示される。感情の変化がさまざまな色彩のピクトグラムとなり、プロジェクターで投影されるのを見て、観客は自らの身体の中で起きている現象をリアルタイムに知ることができるのだ。本作は、こうしたリアリティを取り入れながら、儀式的「祝祭」による恍惚状態を作り出し、香辛料の香りの中で、催眠術のように観客を巻き込んでいくだろう。

2013年9月19日

(訳：佐藤菜美、構成：鈴木理映子)

ナンダン・アラデア

1971年、インドネシア西ジャワ州生まれ。インドネシアの教員養成学校を卒業後、モスクワの芸術大学で演出を学ぶ。2006年にシアタースタジオ・インドネシアを設立し、バンテン州を拠点に活動。09年にFederasi Teater Indonesia で最優秀賞を受賞。10年、ポーランドのFETAに参加。インドネシア国内では、バンテン州知事賞を受賞。11年、ジャカルタビエンナーレに参加。12年、F/T公募プログラムに参加し「バラバラな生体のバイオナレーション! ~エマーゼンシー」で「F/T アワード」を受賞。13年10月逝去。



地球を揺るがした クラカタウの大噴火

クラカタウは、インドネシアのジャワ島とスマトラ島の中間、スンダ海峽に位置する火山島。1883年に起きた大噴火は48,000mにも及ぶ噴煙をあげ、日本やフランスでも潮位の変化が記録されるほどの大規模な津波を起こした。死者は36,000人以上。その後の地球全体の気象への影響も大きく、北半球では平均気温が低下、日本でも翌年の不作の要因となたとされている。また、塵の影響で、異様な赤みを帯びた夕焼けが数年にわたって見られるようにもなり、さまざまな芸術作品、文学にその記録が残されている。クラカタウは活火山で、2011年から12年にかけては活動の活発化も報告されている。

災害の先へ。シアタースタジオ・インドネシアの身体

武藤大祐（ダンス批評家／群馬県立女子大学准教授）

2012年のF/T公募プログラムで初来日公演を行ったシアタースタジオ・インドネシア。池袋西口公園で上演された『バラバラな生体のバイオナレーション！ ～エマーゼンシー』は、その内容もさることながら、まずは都市空間に忽然と現れた竹組みの巨大なオブジェ、剥き出しの肉体や声を駆使したプリミティブ感に満ちたパフォーマンスと、それを取り囲む東京の雑踏、ネオン、喧騒とのシュールなまでのギャップが、日本の観客の脳裏には強烈に焼き付いたのではないだろうか。

『バラバラな生体のバイオナレーション！』は、何やら土俗的な儀式めいた集団作業の中から、唐突に巨大なパラボラアンテナにも似たSF的構造物が生み出され、荒々しく回転し、ついには倒壊する、徹頭徹尾フィジカル（即物的）なパフォーマンスだった。その予測不能にしてドラマチックな展開はもちろん様々な解釈をよんだが、あくまで上演の核にあるのは、人の背丈よりも長い竹材を自在に使いこなす、パフォーマンスたちの肉体的迫力に他ならない。そこには「身体表現」というものの力を日本の観客に再発見させるような、有無をいわせぬ説得力があった。

この作品により演出のナンダン・アラデアはF/Tアワードを受賞、今年のF/T主催プログラムに向けて新作が委嘱された。どうしてもヨーロッパ発の作品に偏りがちな国際舞台芸術祭において、インドネシアの、しかも大量の竹を使ったフィジカルシアターがこれほど注目され、話題の中心に躍り出たことは嬉しい事件だ。われわれの想像力に外から揺さぶりをかける、新しい参照軸が確実に増えたのだから。



日本から帰国後、ただちに構想を練り始めたナ

ンダンの念頭に浮かんだのは、まず「海」と向き合う身体イメージだったようである。東日本大震災と大津波をふまえてのことかも知れない。そこからやがて「船」の形象に焦点が移り、さらに「災害」に直面する身体をモチーフとすることが最終的に決まったという。

インドネシアは日本と同じく火山列島であり、地震も多く、噴火や津波の被害も少なくない。2004年のスマトラ沖地震とアチェを襲った大津波は記憶に新しいところだが、何といても世界史上の事件として知られるのが1883年のクラカタウ島の噴火である。

クラカタウはジャワ島とスマトラ島の間位置する火山島で、三つの火山が一斉に噴火し、推定標高2,000メートルほどもあった島の大半を吹き飛ばす大爆発であった。その衝撃波は地球を7周したと考えられており、高さ30メートルとも40メートルともいわれる巨大な津波が発生、火砕流の被害と合わせて約36,000人が死亡した。また成層圏にまで達した噴煙の影響で北半球全体の平均気温を低下させ、数年にわたり地球規模での異常気象を引き起こすという壮絶さであった（ちなみに、ムンクの『叫び』はこの時に世界中で観測された奇妙な夕焼けを背景に描かれた、という説もある）。

ナンダンたちは今回、この噴火について残された記録や伝承を改めて調べ、災害に人々がどのように向き合い、乗り越えていったかについて考察を深めていったという。災害を「乗り越える」とは一体どういうことをいうのか。そして舞台芸術は、それとどう関わることができるのか。まさに今、日本のわれわれが直面している問いであり、時代や場所を超えた普遍的な問いでもある。

ジャワ西部のバンテン州セランの高原に構えた彼らのアトリエは、周囲に育つ鬱蒼とした竹林を利用した、精緻で美しい竹細工の建物がいくつも集まってできている。ここでナンダンと劇団員たちは、ひたすら体を使って竹を加工し、組み立て、竹とのコンタクトを中心とするトレーニングを積みながら、身体的な経験に基づく想像力を膨らませて来た。彼らは、テーマを「身体で表現する」のではなく「身体を通じて思考する」集団であり、まず最初に巨大な舞台装置を作り上げ、それを使って稽古を始めた。最初はあまりの大きさに演者が持て余していたそうだが、稽古を重ねるうち、広大な空間をいつしか使いこなせるようになっていったという。この過程を、彼らが「空間を小さくしていく」という言い方で表現するのが面白い。そしてこの辺りが、まさに作品のテーマである「乗り越え」への足掛かりになっているようだ。

海、船、そして災害を乗り越える身体。インドネシアと日本を股にかけて構想されたシアタースタジオ・インドネシアの新作は、一体どのような世界をわれわれに見せてくれるだろうか。ここではただ、メンバーの一人であるバグスの印象的な言葉を紹介しておきたい。

「人間は災害を飛び越えたとときに、もっと幸せな状態になっているべきだと思う。昔の人たちに聞いたところ、何人かはクラカタウが爆発した結果、人生が変わって、とても幸せだったと言っていました。そんなパラドックスもある。新しい土地ができ、そこに新しい文化ができ、人々が集まり、新しいことが始まって、とても幸せだったという人もいます。聞いたときは驚いた。悲しくて悲しくて、誰もが泣き暮れていたわけではなく、人生がより実りあるものになった。より自分の人生を良くしていこうというモチベーションにつながっていたわけです」

◎

最後に付け加えておかななくてはならない。すでに報じられている通り、この作品を構想し演出したシ

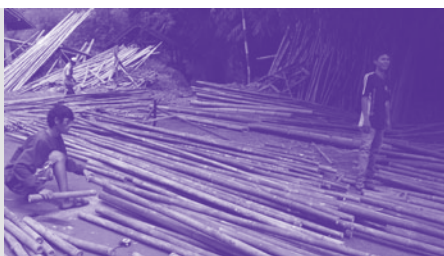


『バラバラな生体のバイオナレーション! 〜エマー・ジェンシー』
F/T12公募プログラム参加作品 © Tsukasa Aoki

アタースタジオ・インドネシア主宰、ナンダン・アラデアは、日本公演を目前にして病に倒れ、10月12日、地元セランの病院で逝去した。42歳の若さだった。

前回公演後、ナンダンはプロデューサーのセノ・ジョコ・スヨノとともに奈良へ小旅行に出かけていた。飛鳥の古墳や石舞台などの古代遺跡を見て来たのだという。そしてこの9月下旬、ナンダンはフェイスブックで筆者にこうメッセージを送って来ていた。「インドネシアと日本に共通する巨石文化をモチーフにした新作を考えている。誰か日本で詳しい人を教えてほしい」。やはりインドネシアのアーティストはスケールが大きい。つねに地球規模のエコロジーとポリティクスを思考するサルドノ・クスマや、原始時代から現代の若者文化までをつないでしまうジェコ・シオンポのようなダンサー、振付家も同様だ。どういうわけか「等身大の日常」から離れられない日本のわれわれとは対極にあるのがインドネシアの想像力なのかも知れない。巨石文化に詳しい人といわれても……と考えあぐねている矢先、突然の訃報が聞こえてきた。

残念ながら、『オーバードーズ：サイコ・カスターロフィー』は、ナンダン・アラデアの遺作となってしまった。作品自体はナンダンによって既に完成されており、残されたメンバーはひたすら稽古を積み重ね、強度を高めていった。遠く離れた二つの国をつなぐ、ナンダンの壮大なイメージの広がりを、私たちは自分の体で受け止めることにしよう。



開かれた場、広がる場

～シアタースタジオ・インドネシアの創作現場～

シアタースタジオ・インドネシアは、2006年の設立以来、インドネシアのバンテン州セランを拠点に活動を続けている。竹で作られたオープンエアの建物と、その前に広がる野原が彼らの稽古場。その創作は、教師、美術家、批評家、ジャーナリストなどからなるコアメンバーによるリサーチやワークショップを出発点に、音楽家や詩人といった芸術的な技能を持った人々、漁師や農民、医者など作品のニーズに応じて集まった地元の協力者の参加を経て、日々変化し、成長していく。

昨年からは、同じジャワ島内バンドンにある竹の研究所、チウィデイにある薬草の研究所（いずれも

舞台づくりのための資材の供給場所でもある）を第2、第3の拠点と定めるなど、その創作活動は、よりいっそう広い視野、多様な角度を持ちながら、インドネシアの過去、現在、未来にアクセスするものとなっている。

*本作品の制作過程を記録したドキュメンタリー映像をF/Tウェブサイトからご覧いただけます。インドネシアという国、自然、そしてそこで暮らし作品を作り出していくカンパニーの様子をどうぞご覧ください。

<http://festival-tokyo.jp/program/13/overdose/>

演出：ナンダン・アラデア
舞台美術・出演：オトン・ドゥラヒム
音響デザイン・映像オペレーター：エンリー・ジョハン・ジャオハリ
出演：ゴディ・スワルナ、ヘンドラ・セティアワン、マブスティ、
アデ・イイ・サリアディン
デジタルムードメーターデザイン：タウヒッド・ヌル・アザール
照明：オマン・アブドゥラフマン
舞台監督・出演：ディンディン・サブルディン
スタッフプロダクション、演出部：ファリッド・イブヌ・ワヒド、
イスバトゥラ・アリバサヤ
経理：ルディ・ルススタンディ
制作：ハサズディン・サティビ、ラトゥ・セルフィ・アグネシア
プロデューサー：セノ・ジョコ・スヨノ、アグス・ファイサル・カリム
アドバイザー：ラノ・カルノ（バンテン州副知事）、H.マルワン、
ジャトニカ・ナンガミハルジャ

東京公演スタッフ

技術監督：寛川英司
技術監督アシスタント：河野千鶴
舞台監督：弘光哲也
演出部：渡邊武彦、加藤由紀子、佐藤 豪
照明コーディネーター：佐々木真喜子（株式会社ファクター）
音響：宮崎淳子（有限会社サウンドウィーズ）
音響コーディネーター：相川 晶（有限会社サウンドウィーズ）
通訳：佐藤菜美

協力：加藤ひろあき、久保田広美（株式会社マノハラ）、中田実紀、野村羊子、
山下陽子

記録写真：青木 司

記録映像：株式会社彩高堂「西池袋映像」

F/Tスタッフ

制作統括：武田知也
制作：小森あや
制作アシスタント：十万垂紀子、砂川史織
フロント運営：滝沢麻衣
プログラム・ディレクター：相馬千秋

ユース・アート・マネジメント・プログラム（YAMP）：乾 亜沙美、植村 真、
川又美樹、奥水すみれ、菅井新菜、塚田佳都、野口 彩、的場久実、三浦彩歌、
山崎 優、山本美幸、吉田由貴

製作：フェスティバル/トーキョー、シアタースタジオ・インドネシア
協賛：ガルダ・インドネシア航空会社
後援：インドネシア共和国大使館
主催：フェスティバル/トーキョー

Garuda Indonesia
The Airline of Indonesia



Direction: Nandang Aradea
Stage Design, Cast: Otong Durahim
Sound Design, Video Operation: Enry Johan Jaohari
Cast: Godi Suwarna, Hendra Setiawan, Mabsuti, Ade Ii Syarifuddin
Digital Mood Meter Design: Tauhid Nur Azhar
Lighting: Oman Abdurahman
Stage Manager, Cast: Dindin Saprudin
Staff Production, Stage Assistants: Farid Ibnu Wahid,
Isbatullah Albasya
Finance: Rudi Rustandi
Production Co-ordinators: Hasanudin Satibi, Ratu Selvi Agnesia
Producers: Seno Joko Suyono, Agus Faisal Karim
Advisors: Rano Karno (Vice Governor of Banten), H. Marwan,
Jatnika Nanggamingharja

Tokyo Performance Staff

Technical Manager: Eiji Torakawa
Assistant Technical Manager: Chizuru Kouno
Stage Manger: Tetsuya Hiromitsu
Stage Assistants: Takehiko Watanabe, Yukiko Kato, Go Sato
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound: Junko Miyazaki (Sound Weeds Inc.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)
Translation: Nami Sato

In co-operation with Hiroaki Kato,

Hiromi Kubota (MANOHARA Co.,Ltd), Miki Nakata, Yoko Nomura,
Yoko Yamashita

Photography: Tsukasa Aoki

Video Documentation: Saikoudo Co., Ltd

Festival/Tokyo Staff

Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordination: Aya Komori
Assistant Production Co-ordinators: Akiko Juman, Shiori Sunagawa
Front of House: Mai Takizawa
Program Director: Chiaki Soma

Youth Arts Management Program (YAMP): Asami Inui, Makoto Uemura,
Mizuki Kawamata, Sumire Koshimizu, Niina Sugai, Keito Tsukada,
Aya Noguchi, Kumi Matoba, Ayaka Miura, Yu Yamazaki,
Miyuki Yamamoto, Yuki Yoshida

Produced by Festival/Tokyo, Indonesia Theatre of Studio
Supported by Garuda Indonesia
Endorsed by Embassy of the Republic of Indonesia
Presented by Festival/Tokyo

シアタースタジオ・インドネシアの演出家、ナンダン・アラデア氏は、2013年10月12日（土）に脳動脈瘤破裂により、42歳で急逝されました。本公演は、彼の志を引き継ぐカンパニーメンバーの強い意志のもとに実現されたものです。私たちフェスティバル/トーキョーは、これまで共に作品の制作に力を注いだナンダン氏に哀悼の意を捧げると同時に、彼とシアタースタジオ・インドネシアのメンバーにあらためて深く感謝いたします。

F/T プログラム・ディレクター 相馬千秋、F/T 実行委員会事務局スタッフ一同

フェスティバル/トキョー組織委員

天児牛大	振付家、演出家
萩田伍	アサヒグループホールディングス株式会社 代表取締役会長 兼 CEO
扇田昭彦	演劇評論家
永井多恵子	公益社団法人国際演劇協会 (ITI /UNESCO) 日本センター会長
越川幸雄	演出家
野田秀樹	演出家
野村萬	狂言師
福原義春	株式会社資生堂 名誉会長 (50音順)

フェスティバル/トキョー実行委員会

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末昌弘	豊島区文化工部長
委員	八巻規子	豊島区文化工部文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事 / 事務局長
	岸正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝勝己	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井健策、北澤尚登 (骨董通り法律事務所)	

フェスティバル/トキョー実行委員会事務局

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	蓮池奈緒子
事務局次長	小島寛大
制作統括	武田知也
制作	河合千佳、喜友名織江、小森あや、 相山由香、高橋マミ、戸田史子
公募プログラムコーディネーター	小山ひとみ
メディア戦略・広報	松本花音
メディア戦略・広報アシスタント	北沢聡子、田村かのこ
オープン・プログラム	藤井さゆり
オープン・プログラムアシスタント	田野入涼子、後藤天
票券	長原理江
票券アシスタント	菅原淳、伊楢敏
チケットセンター	佐々木由美子、佐藤久美子
総務	草原円花、一色善好
経理	堀久美子、青木亮子

技術監督

技術監督	荒川英司
技術監督アシスタント	河野千鶴
照明コーディネーター	佐々木真善子 (株式会社ファクター)
音響コーディネーター	相川晶 (有限会社サウンドワイズ)

アートディレクション+デザイン

ウェブサイト	アジール (佐藤直樹+中澤耕平+菊地昌隆)
パブリシティ	濱田真一+北島謙子+重松佑 (株式会社ソフトラボ)
海外広報・翻訳	平昌子、望月章宏
物販	アンドリュース・ウィリアム
編集・執筆	渡辺淳 鈴木理映子

主催：フェスティバル/トキョー実行委員会

東京都・豊島区 / アーツカウンシル東京・東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場 (公益財団法人東京歴史文化財団) / 公益財団法人としま未来文化財団 / NPO法人アートネットワーク・ジャパン
共催：公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター

協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂、ブルームバーグ エル・ピー

助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、

チャコット株式会社

協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区

観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋インバウンド推進協力会、

池袋ホテル会

メディアパートナー：ART IT、J-WAVE 81.3 FM、新潮、CINRA.NET、美術手帖

ホテルパートナー：サンシャインシティアリスホテル、ホテルメトロポリタン、ホテル グランドシティ、

サクラホテル池袋

地域パートナー：池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人セファール池袋まちづくり

宣伝協力：株式会社ポスターハウス・カンパニー、有限会社ネビュラエクストラサポート (公募プログラム)

会場協力：アサヒ・アートスクエア (公募プログラム)

認定：公益社団法人企業メナ協議会

平成25年度文化庁地域発・文化芸術創造発信インシアブ

[会場] 平成25年11月9日(土)～12月8日(日)

ユース・アート・マネジメント・プログラム (YAMP)：石井菜保子、伊集院明、伊藤安那、伊藤羊子、稲垣美実、乾亜沙美、今井美希、榎村真、太田 光、緒方彩乃、紙 弘、川又美穂、栗田知宏、奥水すみれ、
崔 瀧、作田飛鳥、藤原成行、澤田 唯、清水裕花、菅井新菜、田中ゆかり、宮川仁美、塚田佳都、野口 彩、平沢花彩、嵯 朝美、堀久美、三浦彩歌、水野恵美、守山真利恵、山崎 優、山本美幸、吉田崇大、吉田由貴

発行：フェスティバル/トキョー実行委員会 〒170-0001 東京都豊島区西巢鴨4-9-1 にしすがも創造舎

編集：鈴木理映子、フェスティバル/トキョー実行委員会事務局 アートディレクション+デザイン：佐藤直樹+中澤耕平 (ASYL)、小林 剛

※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。

Festival/Tokyo Organization Committee

Ushio Amagatsu	Choreographer, Director
Hitoshi Ogita	Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd.
Akihiko Senda	Theatre critic
Taeko Nagai	Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Yukio Ninagawa	Director
Hideki Noda	Director
Man Nomura	Kyogen actor
Yoshiharu Fukuhara	Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd.

Festival/Tokyo Executive Committee

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Arts Network Japan Director
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshizue, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Committee Members:
Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section
Hideo Onuma, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasuake, Arts Network Japan Representative
Chiaki Soma, Arts Network Japan Program Director
Supervisor: Katsumi Amagai, General Affairs Director, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisaoki Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Executive Committee Office

Program Director: Chiaki Soma
Administrative Director: Naoko Hasuake
Vice Administrative Director: Hirotomo Kojima
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinators:
Chika Kawai, Orii Kiyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Mami Takahashi, Fumiko Toda
Emerging Artists Program Co-ordination: Hitomi Oyama
Media Strategy: Kanon Matsumoto
Media Strategy Assistants: Satoko Kitazawa, Kanako Tamura
Open Program: Sayuri Fuji
Open Program Assistants: Suzuko Tanoiri, Takashi Goto
Ticket Administration: Rie Nagahara
Ticket Administration Assistants: Nagisa Sugahara, Jyonyong Yoon
Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Ishshiki
Accounting: Kumiko Tsutsumi, Ryoko Aoki

Technical Director: Eiji Torakawa

Assistant Technical Director: Chizuru Kouno
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Akawa (Sound Weeds Inc.)

Art Direction + Design: Asy! (Naoki Sato + Kohei Nakazawa + Masataka Kikuchi)

Website: Shihichi Hamada + Satoko Kitajima + Yu Shigematsu (Ioftwork Inc.)

Public Relations: Masako Taira, Akhiro Mochizuki

Overseas Public Relations, Translation: William Andrews

Merchandise: Jun Watanabe

Editor/Writer: Rieko Suzuki

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee

Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Arts Council Tokyo & Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)

Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)

Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd., Bloomberg L.P.

Supported by Asahi Group Arts Foundation

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO

Special co-operation from SEIBU (IKEBUKUROHONTEN), TOBU DEPARTMENT STORE (IKEBUKURO,

TOBU RAILWAY CO., Ltd., Sunshine City Corporation, Chacott Co., Ltd.

In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping

Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry

Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Inbound Association, Ikebukuro Hotel Association

Media Partners: ART IT, J-WAVE 81.3 FM, SHINCO, CINRA.NET, Bijuus Techo

Hotel Partners: Sunshin City Prince Hotel, Hotel Metropolitan, Hotel Grand City, Sakura Hotel

Ikebukuro

Regional Partners: Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr

PR Support: Poster Har's Company, Nevula Extra Support Co., Ltd. (for F/T Emerging Artists Program)

Venue Co-operation: Asahi Art Square (F/T Emerging Artists Program)

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2013

禁無断転載